

---

# フルメタル生徒会長～地球ＳＯＳ～

( ． )

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フルメタル生徒会長〜地球SOS〜

### 【Nコード】

N7318L

### 【作者名】

(。.)

### 【あらすじ】

時は西暦22年春。

日本の平和は終わりを告げた。

県立堤高等学校生徒会副会長以下、生徒624名が突如武力蜂起。

日本各地へと武力侵攻を開始したのだ。

自衛隊と在日米軍は必死の抵抗を試みたものの、副会長軍の圧倒的威力の前に成す術もなく壊滅。

徹底抗戦を宣言した政府も、その僅か72時間後には無条件降伏を喫することとなった。

そして平成23年

希望は潰えてはいなかった！

## 誕生！フルメタル生徒会長

永遠とも一瞬とも思える時を、生徒会長は覚醒と昏眠の狭間で過ごしていた。瞼の向こうに移り変わる日光と月光、雲の流れ。肌に触れる空気の温度、湿度。それらを生徒会長はただ感じ、意識が覚醒に寄った時には瞼を上げて世界を眺め、それが脳の中に像を結ぶ前にまた昏民の中に戻ることを繰り返していた。

その時が来るまでは。

やがて、という表現が似合うほどすんなりと、その日私は目を覚ました。海水の中で浮沈を繰り返していた体が、ふとした偶然で海面に出てしまった、という印象だった。

「しまった、私としたことが居眠りをしてしまうとは」

私は生徒会室に、一人居残って生徒総会の資料を仕上げていたのだ。今年は三年の女子生徒を中心に、学校指定以外のセーターの着用を解禁してほしいという議題がブチ上がっていた。彼女らとその反対派、主に生徒指導の教師と風紀委員に罵り合いではない議論をしてもらうためにも、手の抜けない仕事があったのだ。

と、それはともかく。床に仰向けという凄い姿勢で寝ていた私は、凝った肩をコリコリ回しながら上半身を持ち上げ、周囲の状況を認識して、自分の正気を疑った。

生徒会室が、まるで市街戦の舞台にでもなったかのように散らかり果てていたからだ。砕けて床じゅうに散らばった窓ガラス。蹂躪された机と椅子。床に墜落した掛け時計。倒れた棚とその下敷きになったファイリング。極めつけは天井だ。鉄筋コンクリート造4階建ての一階だというのに、開いた大穴からは鉄網越しに空が見えている。砕けたコンクリート片は床に散乱し、穴から落ちてきた雨がいくつかの水たまりを作っていた。

「ひどいもんだ。これじゃあ、夜の校舎窓ガラス壊してまわった頃と何も変わらん」

私は暗鬱とした気分で頭を抱え、手に当たった硬いものに驚いた。水たまりを鏡代わりに覗き込んで、またも愕然とする。これでは、正気を失ってしまう方がない。

私の頭には、一握りほどもあるツノがデンと生えていたのだ。いや、生えているというよりは、刺さっている、に近かった。そのツノは私の右額あたり、米神と眼孔を掠めるように開いた大穴の、闇の中に突き刺さっているのだ。穴の縁とツノの間には指一本分ほどのクリアランスがあつたが、流石の生徒会長でも指を突っ込んでみる自信は無かつた。

こんなん刺さつてよく無事だつたな、と、私は水たまりに映つた自分の顔を眺めた。ツノは皮膚が角質化した一般的な角とは違い、複数の柱状結晶が集まって紡錘形になったような、無機的な形状をしていた。質感も青い宝石といった感じ。中に蛍が飛んでいるようにときどきぼうつと光つて、なかなかのオシャレアイテムだ。このザ・ハンサム生徒会長には、結構似合つてる。そんなことを考えながら水たまりの前でカツコイポーズをしようとした、その時。

殺気を感じた。

振り上げた視線の先には、小銃を構えた男のシルエット。印象に残るほど強烈ではないが、屈強な体つきだ。

「生徒会長だな」

男が勝手に喋り出した。

「あなたは第一級指名手配犯として、射殺許可が出ている。観念するんだな」

黙って聞いていれば、とんでもない事を口走つた。自衛隊に追われるような犯罪なんて、した覚え無いぞ。

シルエットでも分かるほど拡大、スロー化されて、男の指がトリガーに掛けられていく。立ち尽くしていた私の身体は、その間に自由を取り戻していた。彼はきっと誤解か人違いをしているのだ。黙って撃たれれば、誤解を解く前に死んでしまう。

私は足元に転がっていた特大のコンクリート塊の影へと飛び込ん

だ。

単発の銃声。

間に合わない?!

しかし跳弾の音は、私から遙かに逸れた天井の隅。

おかしい。

宙空で私は自衛官の方を振り仰ぐ。

そこでは巨大なミニバン、多分エルグランドが、

自衛官の頭をバンパーでフツ飛ばし、

生徒会室に飛び込んでいた。

散乱していた備品を蹴飛ばして、エルグランドはスピンターンで生徒会室に停車した。犬の小便のようにロールした車体に戻る間にスライドドアが蹴り開かれ、中から細い腕が飛び出す。

「乗ってください！生徒会長！」

細腕が喋る。状況が分からない。躊躇った時には、もう私の腕は細腕に鷲掴みにされていた。身体ごとエルグランドの車内に引つ張り込まれる。勢い余って車内を転がり、反対のドアに激突。その時既にエルグランドは、コンクリート片を蹴散らしてもと来た窓へと驀進している。窓枠の向こうに自衛官が飛び出した。暴風のような一斉掃射。エルグランドは怯まず直進。どういう原理か腰ほども高い窓枠を飛び越えて、自衛官を何人か轢き殺し、踊るように高校の外へと飛び出した。

「間一発でしたね」

エルグランドがある程度の速度に乗った頃。それまでスライドドアから追っ手を撃ちまくっていた女性が、車内に身体を引っ込めて言った。彼女はリボルバーから薬莢を車外に捨てると、穴だらけになったドアを閉める。

「久しぶりです、生徒会長」

そう言って微笑む、女性の顔を私は知っていた。銃を手放せば、女性と言うにはまだ若い少女。視線が曖昧にならないように選んだという、レンズの下だけにチタンフレームの走る細い眼鏡。生徒会の

クールビューティー、書記担当の伊藤君だった。

エルグランドは見慣れたはずの、なのにどこか生氣を感じない、まるで真夏日の日中散歩に出たときに見るような街を抜け出た。細い川を渡り、鳥居だけがやたらと立派な神社の前にやってくる。

そして悪びれもせずに、鳥居を潜って神社に踏み入った。

「いいのか？」

「大丈夫でしょう」

「祟られても知らんぞ」

こんなやりとりをしている間にエルグランドは境内の奥へと分け入り、社の裏に停車した。シートの間から前を見ると、倒木と落ち葉に隠れるようにして地下への入り口がこちらに向いている。

シャッターが開き、エルグランドがそれを潜った。そこはもう雑木林ではなく、コンクリートで固められた格納庫だった。

エルグランドが89式装甲車とbBの間に駐車すると、方々から体のデカい男達が集まってきた。伊藤君は出迎え達にどいてと声をかけると、歪んで開かなくなったスライドドアを蹴破った。床に転がったドアの上に、彼女はひよいと降り立つ。

「どうでしたか？」

「邪魔。通れないわ」

屈強な男達が、質量で半分くらいしかない伊藤君のために道を開ける。

「生徒会長、ついてきて下さい」

格納庫がざわついた。私がエルグランドから飛び降りると、そのざわつきは歓声に変わる。

「アカデミー主演男優賞でも取ったような気分だな」

「静かな所に行きましょう。あなたには話すことが山ほど有ります」

伊藤君は男達をどかした時と同じ口調で言う。ちょっとくらいは冗談にも反応してほしいところだな。

通された部屋は会議室のような場所だった。二人で話をするにはかなり持て余す広さで、多分普段はブリーフィングにでも使っているのだろう。

「コーヒーでも飲みますか？レーションに入っていたインスタントですけど」

「頼むよ」

「大切に飲んで下さいね」

伊藤君は言って、ティファールの湯を二つのカップに注いだ。一つは砂糖たっぷり、もう一つは濃いめのブラック。私のは前者だ。

「さて、どこから話せば良いか」

「とにかく、堤市、あるいは日本か。がどうなっているか知りたい。ツノのことも気になるが、後回しだ」

伊藤君は頷き、カップを回す手を止めた。

「もう一年も前になります。2010年の春、堤市で市民624名が武装蜂起するという事件が発生しました。『死にかけたこの国を蘇らせる』という声明と共に、全国各地へと武力侵攻を開始したのです。」

初めは誰もが、日本では珍しい若者の暴動、程度の認識しか持っていないませんでした。でも、違いました。彼等は謎のエネルギー『Sパワー』と、その技術をふんだんに盛り込んだ新兵器『Sアーマー』で、各地の自衛隊と在日米軍を瞬く間に壊滅させていったのです。日本政府は徹底抗戦を宣言しましたが、その72時間後には全面降伏。国連の招集も間に合わない、一方的なクーデターでした。

勿論、国連会議が間に合ったとしても武力介入は無かったでしょう。一つの国をたった三日で降伏させられる軍隊と、戦争をしたい国なんて無いでしょうから」

「フムン」

私は唸り、彼女にその先を促した。

「在日米軍は撤退。生き延びた自衛隊も指揮系統を含めて殆どがクーデター側に回りました。残った私達は各地でゲリラ戦を展開し、



新日本政府を名乗るクーデター軍への抵抗を続けましたが、敵のS  
アーマーに対し何ら有効な手立ても見つからないまま、消耗と被害  
を積み重ねるだけでした」

伊藤君がコーヒーで唇を濡らす。なるほど、『大切に』なんて念  
を押すわけだ。食料の確保も容易ではないだろう。

「しかしここにきて、戦況を打破できる可能性が見えてきました。  
かつて県立堤高等学校の在った座標に、僅かですがSパワーの反応  
が見つかったのです。非活性状態のSパワーがSリーダーに映るこ  
とは無い。クーデター軍の罠という可能性もありましたし、罠です  
らない可能性も考えられました。

しかし私達は賭けたのです。

非活性状態でもしみ出してしまうほどの、強大なSパワーの可能性  
に」

「それが私と、このツノ、というワケか」

右脳が熱くなるのを感じながら、私は彼女の言葉の続きを声にし  
た。しかし伊藤君の表情はキリリと良くはならなかった。

「これが有ればクーデター軍と渡り合えるんじゃないのか？」

頷くような首を振るような、曖昧なモーション。

「Sパワーは心の力、魂の駆動体です。生徒会長のあなたならそれ  
だけのパワーを持つ可能性は充分考えられる。ただ、我々はそれを  
活性化、制御するための関連技術をまだ持たない。生徒会長のパワ  
ーを発揮できるようにするまでは、まだ研究と時間が必要です。そ  
れまでは逃げの一手でしょう 失礼」

伊藤君は不意に席を立ち、私に背を向けるとインカムを耳に押し  
つけた。インカムの向こうの声が、私の耳にも聞こえてくる。内容  
はよく分からないが、かなり切迫している様子だ。

何度か『ええ』や『はい』を繰り返していた伊藤君は、やがて『  
了解、そちらに向かう』という言葉を最後に通信を切った。そして  
身を翻す。

「敵襲です」

「状況は?!」

オペレーターたちの声が不協和音となって飛び交う司令室に、伊藤君の一声が割って入る。近場でMacのキーを叩いていたオペレーターが振り向く。

「北北西140キロの地点にSパワー影2。突然現れました。SRCSから判断して、恐らく敵量産Sアーマー、タルケン」

「尾けられたか。会敵予想時間は?」

「あと7分」

「それだけ有れば充分よ。総員退避!急いで!」  
オペレーター達が動いた。

「総員退避。繰り返し、総員退避」

一人デスクに残った女性オペレーターがインカムに向かい発声、エゴノミクスキーボードをひと叩きして席を立つ。

「私達も行きましょう、生徒会長」

総員退避の音がリピートされる中、伊藤君が私を振り向く。

「了解した」

と、その時だ。司令室、いや基地全体に巨大なサイレンが鳴り響いた。心臓を素手で握り潰されたように、メンバー全員が身を痙攣させる。

「何だ、自爆スイッチでも押したのか?」

「押してません!」

私の声に例の女性オペレーターが反応する。

「違う、これは」

正面のプロジェクターにリーダーが大写しになる。中心には基地の場所を示す三角形、その上やや左よりにはゆっくりと動く二つの輝点。そしてそれから今分離した、猛烈な速度でリーダー中心へ突き進む輝点が一つ。あれは

「高速Sミサイル!」

誰かが太い悲鳴を上げた。

「ここを根こそぎエグる気だ！」

「着弾まで」

「計算するより早いですよ！」

伊藤君の問いかけが終わるより先に返事が来る。

「くそ！」

輝点が迫る。

「生徒会長、あなただけでも」

伊藤君が視線を振る。しかしその先に、私は既に居なかった。

室の中央で一段高くなった、司令官の座席に腰掛けていたからだ。

「何偉ぶってるんですか！」

「どうせ逃げ切れやしないんだろう？」

「ですが！」

「それ以上に！」

私は動揺する書記を一喝した。

「仲間を犠牲にして最終的な勝利を、なんていうその考えが気に入らん！」

腕を組み、威圧する！

「逃げても駄目なら！」

顎を振り上げる！

それに呼応し、天井にシャッターが出現、展開！

「受け止めるまでだ！」

私を乗せたシートがシャッターに、天に向かって撃ち出される。シート下に仕込まれたバネが、私の身体を弾き飛ばしたのだ！

土の壁をブチ破り、尚もシートは上昇を続ける。

雲海を突き抜け、天上の世界へ。

尻の穴がゾクゾクする浮遊感。

それが最高潮に達し、シートが身体から離脱する。

全身に積もった泥を振り払い、太陽を背に。

遠くに弾頭の赤熱が輝く。意識が次のコマに移った時には既にそ

れは拳闘の間合い。

私は嘘パースがつくほどに右拳を振りかぶり！

全身全霊のフックを叩き込んだ！

打ち返されたミサイルは気が触れたように空中をのたうち回り、突然青の濃い天頂へと急速上昇。

アダムスキー型UFOに激突して大爆発。

私はその爆風を背に受けて雲海を再度突き抜け、神社前の舗装路に着地した。碎けたアスファルトが舞い上がり、落下してきたミサイルの破片と交差する。それが落ち着くころ、私は立ち上がり、エネルギーをダンと排気した。

『ご苦労様です、生徒会長』

「ありがとう」

伊藤君の声が直接耳の中に聞こえてくる。自分の腕を眺めていた私は、一応それに礼を言った。

私の身体は鈍い金属光沢を放つ巨体へと変化、言うなれば変身していた。バイザーで見えない顔。ヘルメットを被ったような頭。そこから突き出る強く発光するツノ。肩は広く張り出し、爪先はピンと伸びた形のまま硬質化している。背中から生えているのは巨大なウイングだ。皮膚の質感と硬さはブルーアルマイトフィニッシュのアルミパーツに似ていたが、筋肉を動かすと伸縮したりしわになったりする。

「ヒーローに変身、というわけだな。私はSアーマーになれたのか？」

『変身というよりは装着に近いですね』

「伊藤君が言っていた、周辺機器、とかは要らないのか？」

『もう不要でしょう。Sパワーを周辺機器無しで活性化するなんて前例の無いことです』

「変身する度に体が蝕まれるなんてことは無いだろうな」

『飛天御剣流じゃないんですし、大丈夫なんじゃないですか？』

「なら良かった」

安心したところで、まだ安心はできなかった。私は天を振り仰ぐ。あのタルなんとかというSアーマーがまだ残っていた。

「さて、まだメインディッシュが残っていたな」

『生徒会長のSパワーが有れば楽勝です。とっとと片付けましょう』  
「了解だ。生徒会のみんなにも早く会いたいしな」

『その必要は無い』

私の言葉に応えるように、どこからか声がした。伊藤君のものではない。しかしそれは、私の知らない声ではなかった。

「副会长！」

歓喜の声で彼を呼ぶ。しかしこの声に被さるように、オペレーターのがなり声が耳に突き刺さった。

『敵Sパワー反応が、猛烈な勢いで拡大しています！』  
更に別の声。

『レーダーが真つ白です！いえ、収束！この地点は』  
どこか、それが聞こえる直前。

私は背骨が折り畳まれるような衝撃を受け、吹っ飛ばされた！  
背中的一点に、超圧縮純エネルギーをぶつけられたようなパワー、  
風圧で鳥居と社が砕け散る！

「なんだッ?!」

上空、硬直が解けない内に今度は腹にもう一発！  
地上に激突する直前更に一発！

それが連続、ピンボールのように跳ね飛んで、完全に制御不能！  
と、それを意識した瞬間だ。

格別にヘビーな一撃で、私はもと居た地表に着弾した！

一発一発、床に落とした挽肉にならなかったのが不思議なくらい  
の破壊力だった。正直、これはかなり効いた。

地層まで剥き出しになったクレーターの底に、そのSパワー反応、  
私をパチンコ玉にした奴の正体が降りてくる。

漆黒のアルマイトで仕上げたような、金属的な皮膚。背中で広が

る、悪夢的なウイング。そして後頭部から前へとねじ曲がるように生えた、血溜まりの色に光る角。私の身体と似ていたが、何もかもが、執拗なまでに、正反対の存在だった。

「貴様、何者だ」

「あなたの想像した通りだよ、生徒会長」

そいつが言った。副会長の声を使って。

脳裏に一抹の、絶対に認めたくない、しかし確信的な不安がよぎる。

「じゃあ、伊藤君の言っていたクーデターってのは」

「クウフハハハア！察しの通りだ生徒会長ッ！」

「副会長オ！」

私は吼え、魂の鉄拳を振るう。暴力に訴えることは生徒会長に有ってはならないこと。だが、時に言葉だけで解決しようとしてはいけないことがある。今がその時だった。

しかし私の拳は、私の魂も、副会長には届かなかった。副会長はかき消えるように間合いから姿を消し、数歩分離れた場所に浮かんでいた。

「おっと、今日はほんの挨拶、お出迎えだよ生徒会長」

「逃げるなッ！」

「クッフフ、心配せずとも、決着はいずれつけてやる」

「待て！」

立とうとしたが、さっきのラッシュのダメージが、今になってのしかかってきた。身体が火花を上げ、言うことを聞かない。その間にも、副会長の姿はヘキサゴンプレートに隠れるように消えていく。

「また会おう！フハハハハッハハア！」

「副会長オオオオオオオオ！」

身体と同じように、副会長の声が掻き消えていく。私の叫びもそれと交じり合い、高空へと溶けていく。

戦いの火蓋が、切って落とされたのだ。

## 誕生！フルメタル生徒会長（後書き）

### 予告

次回！フルメタル生徒会長と地球SOS

『頼れる仲間？！新米陸士』

6月8日（火）更新！

君の勇気は何Sパワーだ？！

## 頼れる仲間？！新米陸士

海底から湧き上がる泡のような音楽が空間を満たしている。

カウンターは湿った色のオーク材。その上に差し出される凍結したグラス。その中で転がるつるりとした氷と、それを湿らせる強い酒サーブしたバーテンダーは最小限の、しかし角の無い動きで元の姿勢に戻る。奥の厨房からは調理器具の触れ合う音が微かに零れ、音楽と混じり合っていた。

ところで生徒会長である私は、このダイニングバーのフロア席で料理が来るのを待っていた。向かい合わせの席には書記の伊藤君。二人ともロングコートを着込んだまま、フードも被ったままだ。

「お待たせいたしました」

そんな行儀の悪い客に対しても、サーバーは気にする素振りを見せずに料理を運んできた。コース料理を全部一氣に持ってこいと言われた時点で、既に覚悟は決めていたのかもしれない。

「うつまそオ！」

声を上げて両手を胸の前でパチンと合わせ、フォークだけ二本を手取る。

メニューは海の幸のサラダ、つば焼きクリームスープ、ムール貝のオーブン焼き、ロールキャベツ、ロシアンティー。それらを常に口の中が一杯になるように、二本のフォークで口に放り込み続ける。とにかく腹が減っていたのだ。

「食糧支援のポスターに載ってる子供達でも、あなたよりは綺麗な食べ方をしますよ」

伊藤君は一品目のサラダを口に運びつつそう言った。

「一年間何も口に入れていなかったからな。口の小ささがまどろっこしいよ」

私は手短かに応えてまた食事に没頭した。ロールキャベツを麺のようにする、ムール貝についたマッシュポテトを舐めとる。



副会長が去ったあの後。命を取られずに済んだ自衛隊反乱軍という言い方は駄目らしい。彼等は今も頑なに自分たちを日本国自衛隊、生徒会政府とそちら側についた自衛隊をクーデター軍と呼んでいた。完全に名前負けしているが、そういう心意気が大事らしいと別れ、私と伊藤君は基地を出発した。彼等は竹芝の集結が楽しみだなどとはしゃいでいたが、伊藤君には別の思惑が有るようだった。もともと、それは聞いても教えてくれなかったが。

その事について考えようと思ったが、伊藤君に足で突かれて私はそれを中断した。頬の膨らんだ顔を持ち上げると、彼女は目線できりに、空気を読めバカヤローと言っていた。

店内の空気は、確かに読むまでもなく一変していた。それまで空気を満たしていた音楽は消え、代わりに流れているのはこの場に似つかわしくないニュースキャスターの好印象で無機質な声。食器の触れ合う音は消え、客も、従業員も、皆天井の一角を注視してその声を静聴していた。皆の視線の先では、お仕着せのようなブラウン管テレビが店内を見下ろしている。

「では続いて、生徒会副会長の緊急記者会見を、生中継でお送りします」

記者の声に続き、画面が切り替わった。空気が流れ、カメラのフラッシュが乱れ飛ぶ音。堤高校の制服に身を包んだ一人の男が、フラッシュのホワイトアウトで途切れ途切れになった動作で、マイクの束の奥に腰を下ろす。

副会長。

彼は岩石のように表情を重くして、口を開いた。

「日本国民のみなさん。悲しいお知らせがあります。

我等生徒会政府が発足して一年。反乱軍の心無い破壊行為も沈静化してきましたが、ここに来て、平和への道を閉ざそうとする者が、現れてしまいました」

副会長の声が沈みきったところで、画面は一枚の画像に切り替わった。私が殴り返したミサイルがUFOに着弾、爆発炎上した瞬間

を、私の背後から撮影した一枚だ。どう見ても私が悪魔的な悪役に見える、見事なカットだ。

「なんだ、写真撮ってくれるんなら決めポーズでも作っとくんだっ  
たな」

画面が戻る。

「彼の名は生徒会長。かつて、私の親友だった男です。

彼は革命のさなか、日本の未来のために散っていきました。彼に敬意を表し、私が今も副会長を名乗っていることは、国民の皆様も既知のことだと思います」

「そうだったのか？」

「明らかに嘘でしょう」

「しかし今私が置かれた状況自体嘘みたいなものだからな」

「卑劣な反乱軍は彼の亡骸を探し当て、蘇生洗脳して殺戮マシンに仕立て上げてしまったのです！

私は悲しい！苦しい！口惜しい！

国民の皆さん！今ならまだ彼の洗脳を解けるかもしれません！

彼を見つけ出し、反乱軍の魔の手から救」

副会長の演説がヒートアップしてきたところだったが、突然テレビが音を立てて消えた。どこから投げつけられた詰め物オリーブが電源スイッチに命中したのだ。今までとは別の静寂が店内に広がり、その中を硬い靴音が、不機嫌そうに横切っていった。

「勘定だ」

足音のイメージからてつきり男かと思っていたが、聞こえた声はそうではなかった。見ると髪を極端に切り詰めた、体育会系の大学に居そうな女性が会計に突っかかっている。奥二重の目の下に泣きばくろが見えた。

「申し訳ありません、お支払いはSポイントのみとなっておりますので」

「なんだあ？私は日本国民だぞ！日本の通貨で支払って何が悪い！」  
言っていることは良く分からないが、すぐクダの悪い客だという

ことは分かった。

「しかし」

「とにかく払ったぞ。言つとくがな、私はクーデターが勝手に決めた通貨なんて一円たりとも持っていないぞ。あんなん、どうせすぐ紙切れになっちまうんだ。クーデターなんて、私等自衛隊がちょっと本気を出せば一捻りだからな。ハアツハア！」

女は高笑いとともに店を出ようと、つまり事実上の食い逃げをしようとしたが、突然響いた二つの靴音に身を強ばらせた。

「怪しいと思ってたんだ」

店の奥で、立ち上がった男が威圧する。

「ひよ？」

女が変声を出して振り向いた。

「反乱分子だ。連行する」

もう一人の男が続ける。二人はチャコールのコートを脱ぎ捨て、堤高の制服を女性に見せつけた。右手をかざし、革手袋をはぎ取る。

露になった手の甲にはライムグリーンに光る結晶体。Sクリスタル。

「ひゃあ！タンマタンマ！くそう、誰だあ神聖にして不可侵な生徒会政府をクーデターなんて読んだ奴は！お前か！」

「え？私？！」

無茶振りを受けて会計に立ったフロアが慌てる。

「助けよう、伊藤君」

私は椅子から尻を離れた。

「放っておきましょう、あんなの拾ったところで役になんか立ちませんよ」

「賛同しかねる意見だな。彼女も反乱軍の仲間だろう」

泣きぼくろの女性が、腰を引かれたように後ずさる。

それに焦る風も急ぐ風もなく、我が校の男子生徒が二人、間を詰めていく。

その間にもSクリスタルはSアーマーを生成。

二人の身体をアルミ様の金属が覆い、質量を増大させていく。

「だから怖い顔にならないで！ほら降参するから！」

どうやら伊藤君を説き伏せる時間は無さそうだ。

「彼女の能力についての文句は後で聞く」

私は勝手に立ち上がり、コートのフードをそつと外した。斜め前方で、食べ散らかした料理の向こうから伊藤君がこちらを見ている。

「すまないな」

「そつとやってくださいよ」

「分かってる」

危ないから下がるようにと周囲の客に声を掛けてから、私はセルリアンブルーに光るSクリスタルに力を込めた。それに呼応するように、脳に刺さった部分のクリスタルが熱を帯びていく。

「変身！」

クリスタルと身体の間、クラッチをバシンと繋ぐように、私は怒鳴った。

感覚が急速に拡大。テーブルと椅子が押しのけられ、食べかけの料理が床に散乱する。

フルメタル生徒会長、一応そつと大登場！

「ひゃア！これ以上殖えなくて良い！」

ガツタガタの眼で私を捉え、泣きぼくろの女性が泣き顔になる。

『目標、敵小型Sアーマー・タルケン！数2！』

倒れたテーブルを盾にして、伊藤君が叫ぶ。彼女の声は脳に直接響いた。インカムはつけっぱなしだったのだろう。

「了解だ、伊藤君」

猛然と、しかしあくまでそつと、私はダッシュ！

蜘蛛の子を散らして逃げる客の間を突き抜け、タルケンの一方に肉薄する！

「ん？」

タルケンが肉薄する私に気付く。

「お前！生徒か」

しかし遅い！

口を半開きにしたままの、タルケン・男子生徒の頬に私の鉄拳が炸裂！

タルケン・男子生徒はたまらず卒倒、倒れた上に抜け飛んだ歯が転がり落ちる！

「くそ！」

もう一人の男子生徒がブレードを右手に生成、斬りかかる！

斬撃！暗い店内に飛んだのは火花！

受け止めた私の肘にブレードが伸びる！

タルケンのブレードを振り払い、肘の刃を上腕にロック！

店の天井も斬りつける一撃が、タルケンを弾き飛ばす！

しかしこちらは一撃とはいかなかった。体勢を立て直し、タルケンが距離を取る。次が来るか。私も構えをとったその時だった。突然、店の扉がこちらに向かって飛んできた。その向こうから踏み込んできたのは、店を寿司詰めにできそうな数の男達。もちろん味方ではない。生徒会政府側の自衛官だ。

「また何か出た！」

泣きぼくろの女性の悲鳴が聞こえる。

『どうやら長居は無用のようですね』

伊藤君がテーブルの影から身を乗り出した。

「了解だ、御用になる前にツラかるう」

私は伊藤君を小脇に抱えると、ウイングからドンとパワーを放出。光の粒子を撒き散らして加速する。途中で固まっていた泣きぼくろの女性を拾い上げ、副会長軍の包囲をボウリングのピンのように薙ぎ倒し、ついでに駐機していた葉巻型UFOを貫通。夜の街へと飛び出した。

追っ手を撒いた私は、目についた雑居ビルの隙間に飛び込んだ。巨大化した身体を左右の壁にぶつけ、火花を纏いながら減速し、着陸する。放り出されたゴミ袋から染み出た謎の汁で、空間は饅えた臭いに満たされていた。

伊藤君が腕から飛び降りた後、私は腰を抜かせた泣きぼくろの女性をそっと立たせた。

「もう大丈夫だろう」

彼女は生気の半分を忘れてきたような眼で私を見上げ、思い出したように息を吐いた。そして次の瞬間。

「うっぎゃああああああああああああああああああ！」

断末魔の悲鳴と共に、ゴミバケツを投げつけてきた！

痛恨の一撃だった。悲鳴に肝を潰されたところに飛んできたゴミバケツは、蓄えていた生ゴミと一緒に私に命中した。

「来るな来るな！こつぢぐるな、ああああ！」

そして機関銃のようにガラクタを投げまくる。空き缶、バナナの皮、魚の頭、こうもり傘、それに金床。金床？

Sアーマーに変身したままだったので肉体的ダメージはそれほどもなかったが、それよりも精神的ダメージが危険レベルだ。私はガラクタの弾幕をかき分け、泣きぼくろの女性の両腕を押さえつけた。

「ざわるな、あああ！生ゴミおばええええ！」

「待ってくれ、落ち着け、落ち着いてくれ！私は味方だ！こんなナリでも、君と、日本の味方だ！」

「臭い！ぐざいいいいい！え？今なんて？」

「仲間だ、私は、君の！」

「ああ」

泣きぼくろの女性はようやく納得したのか、放心したような声を漏らして抵抗を止めた。涙と鼻水でずぶ濡れだった顔を拭くと、彼女はフツと深呼吸。泣き顔をキリツと立て直して私に向き直った。

「ご苦労だった。協力に感謝する」

鼻を鳴らしてそう言くと、彼女は黒ずんだ室外機に腰を下ろした。

「何とか分かってもらえたか」

私は角に引っかかっていたバナナの皮を放り捨て、安堵の溜息を吐いた。きわどい勝負だった。本当に。

「よく言っわ」

私を見捨てて逃げていた伊藤君が、すました顔で戻ってきた。私は自分を見捨てて逃げた書記に文句は言わず、泣きぼくろの女性に向き直った。

「まだ名乗ってなかったな。私は生徒会長。あなたは？」

「私は日本国自衛隊二等陸士、蘇我だ。以後よろしく」

「生徒会書記の伊藤です。私達としてはもうさよならしたいところですがね」

「そう言うな、伊藤君。蘇我二等、どうやらこの私達の居たの基地の所属ではないようだ、そちらの方の戦況はどうなっている？」

「ああ」

蘇我二等は曖昧に返事をする表情を曇らせた。風船のように膨らんでいた態度から空気が抜けて、スウッという音が聞こえてきそうだった。

「クーデターの報道を聞いてるだろ？思い出したくもない」

「それで助けを求めに来たわけか」

「もう必要ない。仲間とはつくに全滅したよ。私を除いてな」

フウム、聞いてはいけなかったようだ。

「じゃあ、これからどこへ？」

「竹柴だよ。お前知らないのか？統合幕僚監部は竹柴棧橋に陸海空の全残存戦力を集結させて、クーデター軍との全面対決に臨むんだ」蘇我二等の表情に自信が戻った。だが、どうもこの話題を『明るい話』とするには矛盾が有ることに気付いた。

「だが、統合幕僚本部は私のSパワーのことは知らなかったんだろっ？」

知っていたら士気高揚のためにも集結の命令に併せて情報を流しているはず。だが蘇我二等は私のSアーマーの事を聞いていないようだったのだ。

「なのはどうして」

蘇我二等は黙して答えない。代わりに口を開いたのは伊藤君だった。「軍隊なんてそんなもんです、生徒会長」

「だが自衛官は許可無く死ねないんじゃないのか？」

「それは海兵隊でしょう。日本には未だに、命は散ってこそ華とかいう、感心しない武士道がまかり通る組織が在るということですよ」

誰からともなく溜息が漏れ、それは私達の頭上に線を引く夜空へと昇っていった。今日は良い月が昇っている。だがその綺麗な光が見える空とは対照的に、

澱んだ空気は対流を失い、路地には重い沈黙が溜まっていった。

「ああ、そうだ。生徒会長」

無理をしたのかはたまた地なのか、蘇我二等が雰囲気壊した。

「迷惑ついでに頼みたい事が有るんだ」

まあ、私も本気で暗い気持ちになった訳ではなかったし腹は立たない。生徒会長は落ち込まないのだ。

「何でも聞こう」

「この付近の機械部品工場に自動車の発着所が有るんだ。そこまでの護衛を頼みたいんだが」

「補足します」

私の疑問を瞬時に読み取り、伊藤君が口を開く。私の常識にある一年分のブランクが本当にまどろっこしい。

「副会長は国民の監視を容易にするため、四輪、二輪、装軌に関わらず、一切の自家用車の所有を禁止しました。今では回収された多くの自動車は、乗り捨て式レンタカーと似たような方式で全国の発着所間を往復するために使用されています」

「生徒会政府に追われる身にとっては公共交通機関よりも自分で運転できる移動手段の方が都合が良い、というわけだな」

「あなたのSパワーがあれば発着所の警備なんて簡単に押し切れる。お願いできるか？」

「勿論だ。構わないな、伊藤君」

「問題ありません。私達もSレーダーに映らない移動手段が必要だったところですよ」

「よし、決定！」



蘇我二等は換気扇から立ち上がると、私と伊藤君に向かって掌を差し出した。伊藤君はあまり気持ちのこもらない手でそれを握り返し、私は、  
握手を拒否された。汚いもんな。

とりあえず私の身体を掃除してから私達は夜を歩き通し、そろそろ空気が白みはじめるころに目的の工場に到着した。敷地は大企業的主力工場に比べればかわいいものだが、それでも内部の移動に車が欲しくなるくらいには広そうだ。風向きが変わると、時折併走する運河の生臭いにおいが鼻に入ってくる。

三人は付近の林に身を隠し、交代で休息を取って夜を待った。そして時刻は再び深夜。

昨日よりほんの僅か太った月の光が、工場とその周辺の陰気な市街地を照らしている。それはまた、植え込みの中に隠れて工場進入ゲートの様子を窺う三人のつむじも、同じように照らしていた。

「ゲート右に警備員が一名。他に警戒は無いな」

先頭で取っ手の穴から外を見て、蘇我二等が呟いた。そして極めて自然な流れで、息を目一杯吸い込んでいく。

「蘇我分隊！隠密行動！開始！」

蘇我二等の関の声が星空に響き渡った。それは工場内外の建造物の間を駆け巡り、絨毯爆撃のように人々を覚醒させた。無論工場の従業員や警備員たちも。

伊藤君は激怒した。

「この馬鹿！阿呆！麻婆茄子！あんた隠密の意味分かってる？！」

しかし蘇我二等はそれを無視。

「警備員接近！ゆけ！生徒会長！」

「了解！」

私は勇ましく段ボールをはねのけ、立ち上がった。紺色の制服が手に手に得物を抱いて雪崩れ込んでくる。

「行くぞ！変身！」

私は叫んだ、が、後が続かなかった。Sアーマーが生成される一瞬のタイムラグの間に、私達は三人揃ってさすまたのラッシュを食らって絡まってしまったのだ。格好つけずに変身していればギリギリで間に合ったかもしれないが、後悔しても遅かった。

「どうしたんだ？みんなして」

気の利いた台詞でも言うべきかと迷っていたとき、私達を取り囲む分厚い人垣の向こうから、痰が声帯に絡んでいるような声が聞こえてきた。人垣が割れ、その向こうから声の主と思われる50過ぎの男が現れる。ぷるぷるとした脂肪を腹に巻き付けた、リング型のシルエツトだ。

男性は地面に這いつくばった三人の侵入者に、目線の高さを合わせるようにしゃがみ込んだ。

「戸系製作所堤工場工場長の森本です」

「私は生徒会長だ。今日日本を占領している生徒会政府と戦っている」先ほどから動かなかった人垣がざわついた。

「何危険発言してるんですか！」

伊藤君が怒る。それはそうだろう。たとえクーデターだったとはいえ、今彼等は紛れもなくこの国の為政者だ。あちら側の自衛隊に突き出してくれと言っているようなものだからだ。だが、この工場長は焼き網の上のイカのようになった我々に対等の立場から話しかけた。ならば我々も、対等の立場で話す以外にない。名前も素性も明かさずに要求だけ突きつければ、安全ではあるうが上からの脅迫と変わらないじゃないか。

「この工場ですべてのオートバイを、私達に貸して頂きたい。生徒会政府との戦いに必要なんだ」

森本工場長は同意ではなく承認を求めて従業員達を見回し、彼等に口を開く者が居ないことを確認して右手を軽く上げた。さすまたが引っ込んでいく。

「歓迎します、生徒会長」

私達が通されたのは敷地内の工場とは別の建物。畳張りの床がところどころ凹んだプレハブ小屋だった。普段は詰め所にも使われているのだろう、朝礼で斉唱する社訓や作業服の着こなしについていくつかのポスターが壁に貼ってある。

「どうぞ」

森本工場長は自分でお茶を汲み、私達三人に勧める。他の従業員は中に入れさせなかった。

「お気遣いは結構です」

伊藤君はそれに手もつけずに言った。とりあえず唇を濡らそうとしていた私と蘇我二等はその手を止める。

「それよりも発着場へ案内していただきたい。私達は既に生徒会政府に見えられています。出来るだけ早くここを発たなければ、あなた方も危険に晒すことになってしまいます」

「それはできません」

「何故」

伊藤君の声が苛立った。

「午後10時以降、自動車の使用は禁止されています。今発着場のゲートを操作したりオートバイの静脈認証キーを使用したりすれば、コンピューターに不審な記録が残る。生徒会政府は見逃さないでしょう。朝まで出発を待っていたいた方が、かえって危険な時間を減らせるのです。」

私としては、この工場が生徒会政府に目をつけられる可能性は最小限に止めたい。たとえ製品が生徒会政府向けの何に使われるかもよく分からない代物になっていても、この工場は従業員とその家族全員の生活を支えているからです。何と言われても今夜一杯、明日朝6時までは発着場を動かす訳にはいきません」

森本工場長は柔らかな物腰で、しかし毅然と言い切った。伊藤君は不満の色を隠さなかったが、それでも引き下がる他無かった。

「代わりと言っては何ですが、今晚は泊まっていて下さい。反乱軍などやっていては、ぐっすりと眠ることも難しいでしょう？ 浴場

も沸いていますよ」

「わあい。おフロだあ」

暢気な声で喜んだのは蘇我二等だった。伊藤君はまだ何か言いたげだったが、あえて口にするのは避けた様子だった。

その夜。私は蜜柑のような常夜灯が浮かばせる天井の蛍光灯を見上げていた。腕を嗅いでも生ゴミの臭いがしないって、素晴らしいことなんだな。

私はまだ微かに湿っている髪を分けて、そつと頭の角に触れた。私には伊藤君が言わずにおいた事が何か、何となく分かっていた。彼女の危惧が現実になったかどうか、確認するのだ。

電波に乗って、あの脂っこい工場長の声が脳に届いてきた。

『そうです。生徒会長他二名、確認しました』

頼れる仲間？！新米陸士（後書き）

予告

次回！フルメタル生徒会長！地球SOS！

『強襲！部品工場を救え』

6月21日（月）更新！

君の勇気は何Sパワーだ？！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7318/>

---

フルメタル生徒会長～地球SOS～

2010年10月9日01時15分発行